2305　離島覚書（長崎県・壱岐島）

福岡空港から対馬に向かう機内から撮影

令和５年２月 15 日

壱岐市役所

博多港を８時に出発した九州商船㈱の水中翼船（ジェットフォイル）「ビーグル号」は、定刻通り９時 10 分に壱岐島の郷ノ浦港に着いた。

壱岐島を訪れるのは７～８回になるだろうか。直近では属島の原島、長島、大島を 2016（平成 28）年５月に訪れて以来、およそ７年ぶりになる。今回は自衛隊の許可が得らえたことから残っていた属島の若宮島に行くのが主目的だが、まだ壱岐島についての紀行文を書いていなかったので、合わせて全島を踏査することにしたのだった。

壱岐島は博多から約 70 ㎞北に位置する南北にやや長い亀のような形の島だ。福岡県の博多と対馬のほぼ中間の玄海灘に面する。総面積は 134.63 ㎞^{2}、周囲は 175.9 ㎞である。北方領土を除くと全国で 20 番目に大きな島になる。壱岐本島の他に 23 の属島があり、うち４島（大島、長島、原島、若宮島）の有人島を抱える。

郷ノ浦港には予約していた「みなとレンタカー」が迎えに来ていた。港で軽自動車を借る手続きをする。この会社は７年前にも借りており、車をもってきた女性は「乾」という姓が現地では珍しいものだから覚えていてくれた。事務所まで出向くことなく、手続きを済ますことができたのはこのおかげだ。

島の基本的情報を得るため、最初に郷ノ浦にある壱岐市役所に向かう。

壱岐市は 2004（平成 16）年３月に、島内の郷ノ浦町、勝本町、芦辺町、石田町の４町が合併して誕生した。しかし、庁舎は一本化されておらず、各部単位で旧町役場の建物に分散している。旧郷ノ浦町の庁舎には総務部、企画振興部、市民部と福祉事務所や選挙管理委員会が置かれている。

道路を隔てた反対側に長崎県の壱岐振興局の建物がある。ただし、振興局も市役所の職務部署別に分散しているので、庁舎には管理部があるだけだ。農林水産部のうち農業関係は旧芦辺町、水産課は旧石田町、建設部は旧勝本町にそれぞれ分散し、旧役場庁舎に入っている。

市役所の総務部と企画振興部で資料等を入手する。国勢調査時の壱岐市の人口は 1955（昭和 30）年の 51,765 人がピークで、その後一貫して減少してきた。2020 年国勢調査時の人口は 24,948 人であったから、この 65 年間に人口は半分以下になった。2020 年時点の世帯数は 9,726 戸である。この時点の旧町別の人口は、郷ノ浦町：9,367 人（3,861 戸）、勝本町：5,021 人（1,865 戸）、芦辺町：6,643 人（2,583 戸）、石田町：3,917 人（1,417 戸）という内訳で、旧郷ノ浦町が最も多く、旧石田町が最も少ない。

壱岐市役所郷ノ浦庁舎（左）、長崎県壱岐振興局（右）

麦焼酎

国道 382 号を東に向かい、旧石田町をめざす。

途中の道路脇に「玄海酒造」という麦焼酎の蔵元があり、焼酎資料館が整備されていた。この蔵元はかなりオープンで自由に見学できる。

見学コースの最初に蒸留した焼酎を貯蔵する琺瑯引きのタンクが並ぶ。約 10kl のタンクが 10 基ほどあった。隣には陶器製の１斗樽が並んでいた。購入した顧客のものを預かり、「古酒」にするに違いない。次の部屋にはオークの木樽もある。この会社では「壱岐ゴールド」というブランドの麦焼酎を作っているが、このブランドは通常の貯蔵法（ステンレスタンク）ではなく、木樽で貯蔵熟成している。まるでウイスキィーのようだ。

その先に試飲コーナーがあり、７種の麦焼酎が並んでいた。残念ながら車の運転を控えているので飲めなかった。その他に様々なコンテストで受賞した賞状がたくさん飾ってあり、焼酎の製造工程も解説されていた。

壱岐島は後述するように長崎県内で２番目に広い穀倉地帯を有し、米や麦がたくさん穫れた。米は年貢として重要であったから、年貢の対象外であった麦が酒づくりに活用された。かくして麦を原料とする麦焼酎が生まれたわけである。原料は大麦 2/3、米麹 1/3 の配分で、その伝統が現在でも守られている。ちなみに通常の麦焼酎は麦麹が使われているが、壱岐島の麦焼酎は米麹である。

壱岐の焼酎が文献に登場するのは 1791（寛政７）年とされるので、壱岐島における焼酎造りは 300 年ほどの歴史がある。ただし、当初は粕取り焼酎だったという説もある。島内の

農家に蒸留用のかぶと釜が残ることから、明治初期には自家用に焼酎をつくっていたようだ。

1900（明治 33）年に酒税法が制定され免許制になるが、現在の古いメーカーはこの時にできたものである。壱岐島では、1902（明治 35）年の時点で焼酎専業が 38 名、清酒との兼業が 17 名の合計 55 名が免許を得ている。その後、淘汰が進み、現在に至る。

今では麦焼酎の大産地は大分県になっており、長崎県のシェアは２％にも満たない。大分県は二階堂酒造の「吉四六（きっちょむ）」と三和酒類の「いいちご」が有名であるが、両社ともに麦焼酎を作り始めるのは戦後のことである。つまり麦焼酎は壱岐が発祥の地なのだ。ちなみに私の学生時代は、焼酎といえば甲類（連続式蒸留）で、臭かったから「梅割り」とか「ブドウ割り」で飲んだものだ。もちろん芋焼酎は鹿児島県枕崎市の「白波」が流通していて、こちらの乙類は飲んでいたが、麦焼酎は飲んだことがなかった。後述するように壱岐島の麦焼酎の飲むのは発電所の環境調査で壱岐に来た時が最初であった。なお就職した会社に九州電力から出向者がやってきて、当時「下町のナポレオン」として流行り始めていた「いいちご」を勧められて結構飲んだものだが、ある時、本物の焼酎の見分け方を書いた本を読んで確かめたところ、この焼酎は砂糖が加えられていたので、以後飲むのをやめた。この本には砂糖を加えているかどうかはスプーンに焼酎をとり、加熱して蒸発させ、黒く炭化したものが残るかどうかで判断すると書かれていた。

話がわき道にそれたが、現在、島内には７つの麦焼酎の蔵がある。玄海酒造㈱、㈲山の守酒造、壱岐の蔵酒造㈱、天の川酒造㈱、㈱壱岐の華、重家（おもや）酒造㈱、㈱猿川伊豆酒造の７社である。最も古いのが山の守酒造で、創業は 1899（明治 32）年である。翌 1990 年に玄海酒造、壱岐の華が、1903 年に猿川伊豆酒造が設立されている。一番新しいのが壱岐の蔵酒造㈱で、こちらは 1984（昭和 59）年に６つの蔵元が合併して発足した。

市の統計によると、2020（令和２）年の麦焼酎の生産量は 2,020kl、出荷量は 1,588kl で、コロナ禍にあって生産量も出荷量も減少している。最近のピークは 1985（昭和 60）年の 3,102kl であった。６社のうち生産量が一番多いのは見学した玄海酒造㈱で、これに壱岐の蔵酒造㈱が続き、残りの４社のシェアは５％前後とかなり差がある。

後述するように、壱岐ではけっこう大麦がつくられている。しかし島の人に聞いたところでは、島内で調達している大麦の割合は際立って低く、大部分は島外からの移入（輸入）に依存しているという。

玄海酒造の酒蔵（左）、芋焼酎を貯蔵する琺瑯製タンク（右）

印通寺

国道 382 号の終点が印通寺（いんどうじ）である。壱岐の南東部にあたり、旧石田町の役場が置かれていたところだ。

ここには地方港湾の印通寺港が整備されている。壱岐には港湾が４つある。郷ノ浦港は重要港湾、残りの３つは地方港湾で、そのうちの一つが印通寺港になる。佐賀県の唐津東港との間に１日４便のフェリーが通っており、郷ノ浦、芦辺と並ぶ壱岐島の海の玄関口になっている。なお旧石田町は後述するように壱岐空港があり、空の玄関口でもある。

印通寺の沖には妻ケ島（つまがしま）（面積 0.32 ㎢、周囲 2.4 ㎞）という無人島が浮かぶ。この島が防波堤の役割を果たし、印通寺は天然の良港であった。このように交通の要衝であったことから、印通寺は交易や商業を中心として栄えてきた。古くは遣唐使船の寄港地であり、室町時代には倭寇の根拠地の一つであったとされる。

妻ケ島には江戸時代から 2002（平成 14）年まで１世帯が島守として住んでいた。今は荒れているが、かつては田畑があり、出作地でもあったという。また良質の粘土を産することから瓦が焼かれていた時期もあるようだ。

印通寺は旧石田町の中心だったことから、市役所の石田庁舎、幼稚園や小中学校などの文教施設、フェリーターミナル、石田町漁協、警察署、図書館のあるマリンパル壱岐、後述する松永安左エ門記念館などが置かれている。このうち松永安左エ門記念館に出向いたが、ちょうど水曜日は休館日にあたっていた。

印通寺港に面して変な神社があった。唐人神という。案内板には、「中世の頃、若い唐人の下半身が流れつき土地の漁師が祀ったとされる。腰の下の病気に霊験あらたかることから性神とあがめられ、夫婦和合、良縁、安産等に神通力があるといわれている」と書かれていた。質素な社の周りに男性シンボルを模した石の彫り物やアワビの殻が並べられていた。何でも神にしてしまう「八百万の神」の典型だ。港湾の漁港区域には漁船が 20 隻ほど係留されていた。トローリングの竿を積んだ漁船が多い。

印通寺の背後の小高い丘に「万葉公園」がある。明治百年を記念して、1969（昭和 44）年 10 月に旧石田町が整備した。令和の元号の典拠となったのは万葉集の「梅花の歌」32 首の序文であるが、この 32 首のなかに、736（天平８）年に遣新羅使の一員として新羅に向かう途中、この地で病死した雪連宅満（ゆきのむらじやかまろ）の死を偲んだ歌として、次の首があるそうだ。

「石田野に　宿りするきみ　家人の　いづらとわれを　問はばいかに　言わむ」

この万葉集と雪連宅満にちなんで、万葉公園と命名されたようだ。

石田町漁協（左）、印通寺港のフェリーターミナル（右）

壱岐島の水産業

港から一本背後にある壱岐市役所の石田庁舎に向かった。石田庁舎はもとの石田町役場である。１階は壱岐市の農林水産部と農業委員会、２階に長崎県振興局が入っている。振興局には農林整備課、水産課、壱岐水産普及指導センターが置かれている。つまり石田庁舎は１次産業を扱う行政機関になっているわけだ。最初に市役所の水産課に伺い、統計データを入手するとともに、壱岐の水産業について話を聞いた。

市内には表１に示す５漁協が組織されている。基本的に旧町に一つの漁協があるが、旧芦辺町だけは箱崎と壱岐東部の２つに分かれている。2020 年度の正組合員数は 803 人で、勝本町漁協が最も多く、これに郷ノ浦漁協が続く。漁船数は 1,418 隻で、経営体数を若干上回るから、基本的に１経営体１隻が標準だ。生産量は 2,468 トンで、生産額は 24.78 億円であった。

表１　壱岐島の漁協別組合員数等の概要（2020 年度）

漁協名	組合員数			経営体数	漁船数	漁業生産量	漁業生産額
	正	准	合計		隻	トン	百万円
郷ノ浦町漁協	212	491	703	350	516	542.7	715
勝本町漁協	228	329	557	518	344	1,142.4	1,039
箱崎漁協	114	79	193	81	295	641.3	339
壱岐東部漁協	150	323	473	207			221
石田町漁協	99	336	435	174	263	141.7	164
合計	803	1,558	2,361	1,330	1,418	2,468	2,478

「壱岐市統計書」より作成

漁協別の主な漁業は表２に示す通りで、ケンサキイカとスルメイカを対象とするイカ釣りとサワラ、カジキ、マグロなどの一本釣、ブリやクエの延縄が中心である。網漁業は少なく、定置網と刺網だけだ。定置網は壱岐東部漁協を除く４漁協で営まれているが、後述するように箱崎漁協では大型定置網と小型定置網を漁協自営で営む。

かつてウニ類やアワビの採貝藻漁業（潜水漁業）が盛んであったが、近年は「磯焼け」が進み、特にアカウニは壊滅状態になっており、不振を極めている。

イカ釣りのうち、ケンサキイカは昨年の夏はまあまあよかったが、スルメイカは依然として不漁が続いているという。

養殖業は、郷ノ浦漁協でイワガキ養殖、壱岐東部漁協でマガキの養殖が漁協自営で始まっているが、小規模である。魚類養殖は、金子産業がマダイ、ブリ類、クロマグロを、橋本水産がヒラマサの養殖に取り組んでいる。また、真珠養殖と真珠母貝養殖が湯本湾、半城湾、内海湾で営まれているが、何れも民間業者である。加えて地元で建設会社を営む㈱なかはらが郷ノ浦で 2018（平成 30）年３月からトラフグとヒラメの陸上養殖を始めている。石田地区では３経営体（個人１経営体、会社組織２経営体）が陸上でアカウニとアワビの養殖を始めているという。

産地市場は勝本町と郷ノ浦町の両漁協が開設している。出荷仲買を含めて一定数の仲買人がいる。島内の水産物消費は水揚げ全体の３％ほどで、島外への出荷が中心であり、全国に出荷している。壱岐の東部海域でブランド化を進めているサワラは岡山県への出荷量が

多い。

続いて２階の長崎県壱岐振興局の水産課に出向いて取材する。このように県の振興局の各部署は庁舎の行政部署に対応しているのが壱岐島の特徴でもある。

振興局では養殖について話を聞いた。イワガキ養殖は郷ノ浦地区で離島漁業再生支援交付金を導入して始まったとのことだ。イワガキの種苗は長崎市及び対馬栽培漁業センターでつくっているがどこから仕入れているかはわからないとのこと。真珠養殖は民間業者が営むが、何れも天然採苗ではなく、人工種苗から育てている。マグロ養殖用の種苗であるヨコワは地元では獲っていないので、島外から導入しているようだ。

壱岐島においても「磯焼け」が進んでおり、海藻類は激減しているという。磯焼けの原因は藻食性魚類（アイゴとイスズミ）による食害である。五島列島沿岸では大型海藻はおろか中型のヒジキもほぼ壊滅状態にあるが、壱岐島ではヒジキが生育しているところも見られ、五島列島ほどひどい状態ではないとのことだった。

表２　漁協別の主な漁業

漁協名	主な漁業種類
郷ノ浦町漁協	イカ釣、一本釣、曳縄、延縄、小型定置網、採貝藻、刺網、イワガキ自営養殖
勝本町漁協	イカ釣、一本釣、曳縄、小型定置網、刺網
箱崎漁協	大小型定置網、一本釣、イカ釣、曳縄、延縄
壱岐東部漁協	一本釣、採貝藻、曳縄、刺網、カキ自営養殖
石田町漁協	一本釣、イカ釣、曳縄、採貝藻、小型定置網、刺網

聞き取り調査より作成

対馬島における正組合員数と漁業生産額の推移を図１に示した。

1994 年時点の対馬における漁業生産額は約 80 億円であったが、2020 年には約 25 億円に激減している。四半世紀の間に 1/3 以下になった。一方、正組合員数はほぼ一貫して減少しており、1994 年の 2,199 人から 2020 年には 803 人と６割減になっている。生産額の減少よりも正組合員数の減少は相対的に緩やかだが、このことは正組合員１人あたりの生産額は少なくなっていることを物語る。

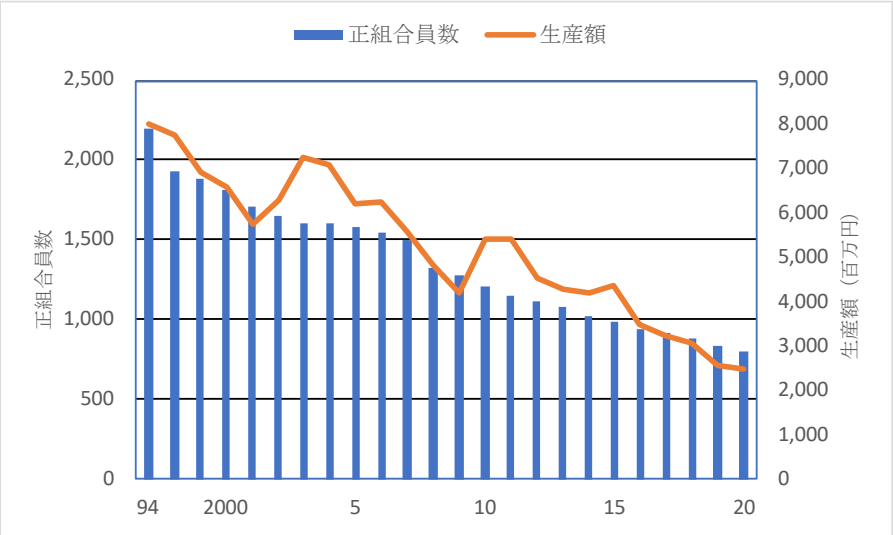


図１　　壱岐島の正組合員数と漁業生産額の推移　　**「壱岐市統計書」より作成**

一支国博物館

昼休みになったので、石田庁舎を辞去して、壱岐市立一支国博物館に行く。この博物館は後述する「原の辻の環濠集落跡」が望める高台にある。2010（平成 12）年３月にオープンしているので、今年で 13 年目に入った。

博物館は４階建てで、建築家黒川紀章（1934～2007）の最後の作品になるらしい。１階にエントランスホールがあり、ホールの左手に２階から続く展示室、右手に長崎県埋蔵文化センターの収納庫（長崎県内で出土した遺物が一堂に収納され、一部はオープンにされている）、ミュージアムショップ、キッズこうこがく研究所、埋蔵品修復の作業室などが置かれている。２階はビューシアター、３階に喫茶コーナーと図書室、会議室が整備され、屋外が展望広場になっている。４階部分は塔になっていて最上段が展望室だ。展望室の標高 27m で、360 度が展望できる。

昼食の時間になっていたので、まずは３階の喫茶コーナーに行き、高菜漬け入りのおにぎりと肉うどんを食べる。

続いて４階の展望台に登る。ここからは長崎県で２番目の広さを誇る深江田原平野を一望できる。面積は 300ha に及ぶようで、田と麦畑が整然と広がっていた。また「原の辻の一支国王都復元公園」が平野の中心部に見られた。

４階から２階に降り、13 時からのビューシアターで壱岐を紹介した映像を７分間鑑賞した。映像で壱岐島の概要を理解した上で館内の展示を見るという段取りになっている。シアターの隣に「『魏志』倭人伝の世界」というコーナーが設けられている。魏志倭人伝は西暦 280～297 年に書かれた三国志の中にある倭人（日本人）について書かれた部分で、壱岐が初めて文献上に登場するのがこの書物である。原文では「一大国」になっているが、「一支国」の書き間違いとされている。

同書には、朝鮮半島から順に対馬国、一支国、末盧国、伊都国、奴国、不弥国、投馬国、そして邪馬台国にいたる記述がある。一支国については、「また南にわたること千余里で一支国に到着する。この海は瀚海と名づけられる。この国の大官もまた卑狗、次官は卑奴母離という。広さ三百里ばかり、竹木・叢林が多く、三千ばかりの家がある。ここはやや田地があるが、水田を耕しても食料には足らず、やはり南や北と交易して暮らしている。」（現代語訳）と書かれている。つまり船による通交が発達していて、壱岐の人々はこの当時から交易によって生活を支えていたとされている。邪馬台国がどこにあったのかは定かでない。

シアターからスロープを下りながら、展示を観る。館内では背の低い女性ボランティアガイドの方がつきっきりで案内してくれた。「通史ゾーン」「古墳ゾーン」を過ぎると１階部分になり、「海の王都原の辻」の紹介、「一支国トピック」と続く。

収蔵品のなかで、国の重要文化財に指定されているものは、高麗版大般若経の初彫本、①弥生時代の朝鮮系無文土器、瓦質土器、さおばかりの錘として用いられた権、貨泉、馬車の本輪を留めるための車馬具、三翼鏃（機械仕掛けの弓に用いた矢の鏃）、とんぼ玉、鉄鎚、銅鏃、卜骨、人面石、捕鯨線刻土器、竜線刻土器、②古墳からの出土品である金銅製亀形飾金具、金創製轡、金銅製辻金具、金創生杏葉、金銅製単鳳環頭太刀柄頭などである。

展示室には島内の車出遺跡群、カラカミ遺跡、原の辻遺跡などから遺跡から出土した約 2,000 年前の動物の骨、土器類、道具類、武器類などが展示されている。また当時のものを再現した木造船も置かれていた。後述するように壱岐島にはきわめて多くの古墳があるが、

古墳からの出土品は博物館に集められている。

動物の骨でつくられた銛や鮑オコシなどの漁具が展示され、さらに鯨の骨や上述した捕鯨線刻土器があるということは弥生時代から捕鯨が行われていたわけであり、壱岐では当時から漁業が盛んだった証拠だ。

また展示品のなかにカラカミ遺跡から出土したベンガラで土器をコーティングした壺や鉢類があった。今から 2,100 年前の弥生時代中期になると、北部九州を中心とした西日本一帯で土器に色を施す丹塗り土器が流行する。壱岐島内の遺跡でも数多くの丹塗土器が発見されていることから本土との技術的交流があったことを物語る。カラカミ集落は丘陵上に位置していたからベンガラでコーティングすることによって中に入れた液体が漏れるのを防いだといわれている。またこの時代に鉄をつくり、加工もしていたようだ。

一支国博物館の展望塔（左）、国の重要文化財に指定されている人面石（右）

原の辻遺跡

博物館を見学してから深江田原平野の一角に広がる「原の辻一支国王都復元公園」に行く。ここは上述した「原の辻遺跡」を復元した公園である。

この遺跡は弥生時代から古墳時代にかけての環濠集落で、魏志倭人伝に記された一支国の王都と特定されている。弥生時代の遺跡としては、静岡県の登呂遺跡、佐賀県の吉野ケ里遺跡と並び、2000（平成 12）年に国の特別史跡に指定された。

原の辻遺跡は 1904（明治 37）年に発見されている。戦後、1951（昭和 26）年から東亜考古学会によって 1961（昭和 36）年まで継続的に発掘調査が進められた。その後、1974（昭和 49）年の大原地区の造成工事に伴って甕棺墓や石棺墓が偶然発見され、翌 1975（昭和 50）年から３ヶ年計画で原の辻遺跡範囲確認調査が実施されたのである。

1991（平成３）年には２ヶ年計画で原の辻遺跡を流れる幡鉾川総合整備計画に伴う事前範囲確認調査が行われ、1993（平成５）年からの大規模な調査で、多重の環濠を有する大規模集落であることが判明した。また、内海湾から幡鉾川（壱岐最大の河川で、中心延長は 8,759 m）を２kmほど遡った壕の外で、船着場の跡も発見されている。内海湾から入港した船は幡鉾川を上って原の辻遺跡を訪れ、交易が行われたと推定されている。

公園には当時の竪穴建物や高床式建物、祭殿など 17 棟が復元されている。この公園の面積は約 24ha に及ぶ。ちょうど、観光バスの一団が公園を訪れ、ガイドの案内でそれぞれの建物を巡っていた。

深江田原平野の中心部に位置するため、周辺は麦畑とビニールマルチを敷き詰めた葉タ

バコの畑が広がっていた。葉タバコは苗を育苗中ですでに植え付けの準備は終わっているようだ。麦畑の周辺にはビニール製の黒い旗がたくさん並んではためいており、異様な光景である。カラスなどの鳥害対策なのか不明だが、こんな光景はみたことがない。

原の辻遺跡の全景（左）、復元された弥生時代の集落（右）

壱岐島の農業

深江田原平野は壱岐最大の農業地帯である。この農業地帯を後にして、再び市の農林水産部農林課に伺い壱岐の農業について取材した。

壱岐島は対馬島とは異なり、平地が多いことから農業が盛んである。2020（令和２）年の耕地面積は 3,450ha で、島の面積全体の 25.8%に相当する。

2020（令和２）年の農家数は 1,818 戸で、販売農家が 1,142 戸、自給的農家が 676 戸という内訳であった。もちろん農家数は一貫して減少している。

同年の農業産出額は 56.6 億円である。産出額のピークは 2017（平成 29）年の 69.2 億円であったから、この年から減少傾向に転じた。この原因は主に畜産業の産出額の減少が影響している。ちなみに農業産出額は漁業生産額の２倍強に相当する。1980 年代までは漁業生産額は 100 億円を大きく上回っていたから、漁業の衰退が顕著である。

作物別の内訳は、畜産（肉牛）が 41.9 億円で圧倒的に高く、全体の 74.0%を占める。これに米の 4.6 億円、野菜類の 4.5 億円が続き、葉タバコと果実類がそれぞれ 2.2 億円という内訳である。

畜産は肉牛の繁殖と肥育の両方が行われているが、畜産については後述する。牧草地をあまり見かけなかったので、餌の多くは移入ないし輸入に依存していると思われるが、飼料用のコメであるＷＣＳ（ホールクロップサイレージ）が 320ha の田で栽培されている。こちらは繁殖用の親牛に食べさせているらしい。

令和２年における米の栽培面積は 826ha で、生産量は 1,618 トンであった。この中に飼料米がどの程度含まれるかは不明である。米と並んで麦も作られているが、栽培面積は約 200ha で生産額は 4,000 万円ほどである。

野菜類はアスパラガスとイチゴに代表される。アスパラガスは 3.6 億円、イチゴは 1.7 億円である。合計は上述の数値（4.5 億円）と異なるが、出典が異なるためだ。両種ともに温室栽培である。ビニールハウスに黄色のポールが立っているのがアスパラガスのハウスで、70 戸が営む。ポールが立っていないのがイチゴで、こちらは 32 戸が栽培している。野菜類

ではメロンの他にブロッコリーやカボチャを栽培する農家もいる。野菜類は何れも島外への出荷がメインだ。

葉タバコはかつて島の重要な耕種であったが、タバコの需要が減少していることから栽培農家と栽培面積が縮小しており、令和４年時点の栽培農家数は 12 戸になった。また、栽培面積は約 30ha ほどである。葉タバコの畑にはすでにビニールのマルチが敷かれて植え付けの準備は整っていた。現在、苗を育苗中で、沖縄などの暖かい地方に比べるとだいぶ遅い。

花卉類は小菊がメインで、生産額は 6,000 万円ほどで推移している。

黒い旗がたくさん立つ麦畑（左）、ビニールのマルチが敷かれた葉タバコ畑（右）

壱岐空港と筒城浜

深江田原の田園地帯から再び長崎県壱岐振興局の水産課に戻り、昼休みで中断していた取材を追加する。

続いて印通寺の東に位置する壱岐空港に行った。同空港は岩礁海岸のすぐ脇に南北方向に滑走路がつくられている。1966 年に開港し、現在、ＯＲＣ（オリエンタルエアブリッジ）のプロペラ機が就航している。長崎空港との間を午前と午後の２便が通う。陸路だと、長崎から郷ノ浦まで乗り換え時間を含めて５時間前後を要することから、約 30 分で長崎空港と壱岐島を結ぶＯＲＣは大変便利であり、したがって需要もそれなりに多いようだ。

空港の北側に筒城（つつき）浜が広がる。約 600ｍの長く白い砂浜が続き、背後に松林が連なる典型的な白砂青松の海岸である。この浜は「日本の渚 100 選」「日本の快水浴場 100 選」にも選定されており、壱岐島を代表する海水浴場になっている。

筒城浜は筒城岬と空港北側の岩礁域に囲まれたポケットビーチである。1970 年代に筒城崎の根元にある七湊漁港（第１種）に沖防波堤ができたことにより、波が遮断されて、漁港の根元に砂が堆積、反対の南側の海岸が侵食されるという海浜変形が生じ、問題となったこともあったが、現在は安定し、定常状態が保たれているようだ。ちなみにこの七湊漁港には漁船 15 隻と船外機７隻が係留されていた。

砂浜の背後は広大な芝生の広場になっており、「筒城浜ふれあい広場」と呼ばれている。ここには各種のスポーツ施設、キャンプ場、野外ステージ、レストランなどが整備されている。

また道路脇には白沙八幡（はくさはちまん）神社の大きなコンクリート製の鳥居が道路脇に建っていた。付近には田んぼや牛舎があり、一帯は田園地帯となっている。

壱岐空港（左）、筒城浜海水浴場の砂浜（右）

新壱岐発電所

壱岐空港と筒城浜を回って、再び印通寺を経て、深江田原平野の田園地帯を抜け、内海湾に浮かぶ青島という小さな島に行った。本土側から橋が架かっており、ここに九州電力の新壱岐発電所が置かれている。ここは思い出の場所でもある。

この青島に九州電力㈱が火力発電所を建設することになり、島周辺の海域環境の調査で来たのが壱岐島への最初の訪問だった。壱岐島にはすでに芦浜に火力発電所があったが、電力需要が増えたため新たな立地場所を求めたものと思われる。まだ環境アセスメントは制度化されていなかったし、小規模な発電所については資源エネルギー庁の指導も入っていなかったが、九州電力は独自の判断で環境調査を実施することになり、私が勤めていた会社が調査を受注したのである。水質、底質、プランクトンの調査や潮間帯生物調査に加えて、島の周辺に分布していたアマモ場も調査した。

調査のため壱岐島の飛行場に降り立った時、偶然、当時東大農学部水産学科の助手をしていた桑原連さんにお会いした。桑原先生はその後、東京農業大学のオホーツクキャンバス（網走）の教授になられ、最近亡くなっている。勤めていた会社の顧問のようなことをされていたので、よく存じ上げていた。

桑原さんから「今晩、大曲さんという方の実家で懇親会があるから一緒に参加しないか」と誘われた。大曲さんはたしか長崎県の環境関係の公益法人に勤めていた関係から桑原先生に仕事を頼んだようだった。大曲家の宴会では、壱岐の水産物がたくさん出てきた。特に当時豊富だったアカウニをいやというほど御馳走になり、地元の麦焼酎をしこたま飲まされて、激しい二日酔いになった。

しかしこの時にご馳走になった壱岐特産のアカウニは今や壊滅状態にある。島のあちこちにウニ丼やウニ瓶詰の看板が出ていたが、今やムラサキウニがわずかに採れているに過ぎないことを知る立場からは白々しく感じさせる。

青島大橋を渡り、青島に入った。青島には新壱岐発電所があるだけで、住民はいない。発電所の出力は 24,000kw で、重油を燃料とする内燃力発電所である。青島の橋とは反対側に重油を受け入れる桟橋が延びている。青島大橋の青島側のたもとには小さな社の青島神社が鎮座していた。島と本島を結ぶ電線は見られなかったので海底ケーブルで本島内に送電しているのだろう。

新壱岐発電所が立地する青島（左）、青島に通じる青島大橋（右）

内海湾と八幡半島

内海（うちめ）湾の北側に八幡半島が伸びている。内海湾は一支国の王都である原の辻を訪れた古代船が往来した玄関口である。古代船は、内海湾で小舟に荷物を積み替え、幡鉾川を遡って通って原の辻の船着場に向かったといわれている。

内海湾内には上述した青島の他に、赤島や伊佐島、前小島などの無人島が浮かぶ。このうち前小島は砂州で本島側とつながっており、干潮時には陸続きになる。前小島には鳥居が立ち小島神社が置かれている。このため、フランスの観光地を模して「壱岐のモンサンミッシェル」と呼ばれ、パワースポットとして観光地になっているようだ。

青島大橋の西側はカキの養殖施設、東側にはヒトエグサ養殖と真珠母貝養殖の施設が置かれている。

湾の北側、つまり八幡半島側には八幡浦漁港（第１種）が整備されており、柏崎地区と八幡浦地区に分かれる。柏崎地区には漁船９隻、船外機８隻ほどが係留されていた。また「海琳」と書かれた真珠母貝養殖を営む会社の筏小屋と作業場があった。八幡浜地区は大きな漁港で多数の漁船が係留され、ここには壱岐東部漁協の事務所が置かれている。時間が遅くなっていたので漁協の取材は後日に回す。

漁港の入口付近に「はらほげ地蔵」が置かれている。６つの地蔵が並び、赤い帽子をかぶる。この地蔵様は壱岐の観光名所の一つになっている。ちょうど干潮時にあたっていたので、全身を見ることができた。地蔵のお腹の部分に穴が空いているので、ほらぼけ地蔵と呼ばれているらしい。

この地蔵は、①遭難した海女の冥福を祈る、②漁獲した鯨の供養、③体内の病気を洗い流すというご利益がある、と言われている。地元の各戸は、彼岸明けとお盆に参詣し、旧暦の10 月 24 日に地元の人々によって供養されている。

漁港のはずれに八幡宮・金刀比羅が置かれ、長者原崎では新生代第３紀中新世（約 1500 万年前）の化石層が発見されている。

半島先端を北上し、左京鼻に出て、八幡半島北側の海岸沿いの道路を走る。北から強い風が吹き、南海岸とは打って変わって海は大時化だった。県道 174 号を通り壱岐島を横断、すでに陽が暮れかけていたので、旧勝本町の湯ノ本温泉に向けて一直線に走った。

砂州でつながる前小島と小島神社の鳥居（左）、八幡浦漁港のはらぼけ地蔵（右）

湯ノ本温泉

湯ノ本温泉は神功（じんぐう）皇后が三韓出兵の折に壱岐に立ち寄られた際、路傍に湧き出る温泉を皇子（応神（おうじん）天皇）誕生の産湯に使ったという伝説が残されており、「子宝の湯」としても知られている。つまり湯ノ本温泉は 1500 年以上の歴史を誇るわが国でも屈指の古湯なのだ。

湯ノ本温泉にある平山旅館に以前２回泊まったことがある。ここの温泉は鉄分を含む塩化ナトリウム泉で、赤褐色を呈している。湯温は高く平山旅館には水蒸気を利用した蒸し風呂があった。仕事で忙しく飛び回っていて体調を崩していた時期に、平山旅館の蒸し風呂に入り、首筋の痛みが癒され、疲労が吹き飛んだことから、この旅館は気に入っていた。そして食事も素晴らしく、地元の海産物が豊富に提供され、朝食にはできたての豆腐と自家製の新鮮野菜がふんだんに出た。しかも当時はビジネス料金で安く泊まれたのである。

しかし、私のような体験をした人が多かったようで最近は人気が出てきていた。事前にホームページで調べると、最も安いコースで 17,600 円と高額である。以前と比べかなり高くなった気がしたので、同温泉の別の旅館も経験してみようと、今回は千石荘と国民宿舎壱岐島荘に泊まることにした。ちなみに湯本温泉には７軒の宿泊施設があり、総収容人数は 300 人である。千石荘は町中にあり、木造２階建てのこじんまりした旅館であった。

千石荘には貸し切りの家族湯と男女それぞれの大浴場がある。ちょうどチェックインするときに男女６～７人のグループが立ち寄りの湯を利用しに来たので、旅館のご主人は気を利かせて家族湯に案内してくれた。小さな木製の浴槽で湯がちょろりちょろりと出る。かけ流しだ。湯温が 60℃以上あるので、蛇口をひねると大変なことになる。泉質は平山旅館と同じで、赤褐色を呈した塩化ナトリウム泉である。翌朝は大浴場に１人で入ったが、大浴場とは名ばかりで４～５名しか入れない。

温泉を出て、１階の夕食会場に行く。夕食は、糸モズク酢、天然の小ぶりのマガキ、ブリ、クロダイ、ヒラメの刺身、サメの湯引き、カマスの塩焼き、茶碗蒸し、「ひきとおし」という壱岐名物の鍋物であった。この「ひきとおし」というのは地鶏が島で一番の御馳走だったころにおもてなし料理として出された鍋物である。つまり鶏鍋だ。名前の由来は「座敷にお通しして」からきているようだ。

こちらの旅館も料理はまずまずだし、部屋もこぢんまりとして古風であり、料金は安い。コストパフォーマンスから見ればお勧めである。

旅館千石荘のお風呂（左）、夕食（右）

令和５年２月 16 日

勝本町漁協

朝食後、８時に宿泊先の旅館千石荘を出発し、湯ノ本湾を視察する。湾の東岸には湯ノ本漁港（第１種）が３ヶ所に分かれて整備されている。湾奥の一角に「山口温泉」や「すこやか温泉」という日帰りの温浴施設があった。漁港周辺には、白滝公民館が置かれ、漁船の修理工場もある。

田園地帯の道を北上し、勝本に向かう。道路沿いには棚田が多い。

旧勝本町役場には壱岐市の建設部が入っているので、管内図を入手しようと訪ねたがあいにく管轄外で、郷ノ浦の管財課で入手できるとのことであった。

坂を下った先が勝本町漁協である。漁協の１階部分にある卸売市場を訪ねた。市場は６時から始まっていたのですでに取引を終え、片づけられた後だった。市場には仲買人名簿が貼り出されており、数えると 27 社であった。長崎県漁連をはじめとする出荷仲買が４社、鮮魚店やスーパーなどの小売業、平山旅館や壱岐島荘などの宿泊施設など様々だ。量的には大部分が島外への出荷だという。

10 時に漁協が経営する観光船で海上自衛隊壱岐警備所のある若宮島と隣接する辰ノ島を回り、11 時に漁協の桟橋に戻ってきた。

事務所の２階に上がり、村井篤雄参事に取材した。

現在の勝本町漁協の正組合員は 221 人である。多い時には 364 人いたので、４割減になっている。漁船数は 540 隻だったものが 332 隻に減少。さらに 10 年前の水揚げ金額は 24.4 億円だったが、2021 年には 7.8 億円になっているので、この 10 年間で 1/3 に激減したことになる。そして正組合員１人あたりの水揚げ金額も大きく減少した。

勝本町漁協の漁業はイカ釣りに代表される。イカ釣りは基本的に周年営まれており、春から秋にかけてはケンサキイカ、冬季はスルメイカの漁期である。ただ近年はスルメイカの不漁は続いており、イカ釣り漁業の経営は厳しく、廃業が相次いでいるらしい。

19 トン型のイカ釣り船は多い時には 60 隻あったが、現在は 20 隻ほどに減っている。また、４トンクラスのイカ釣り船は 100～150 隻で、こちらがメインだ。最盛期には１日に一万箱も水揚げされた時代があったが、今では１隻しか出漁せず８箱だけにとどまるという惨状の日もあるらしい。これだけ供給量が減っているから、豊漁の時は１箱 1,000 円ほどの

価格であったものが、現在は 5,000 円ほどに高騰している。しかし如何せん量が獲れないから漁業経営は厳しい。なお、勝本町漁協ではイカを活魚で出荷していない。

イカ釣りに次ぐのが一本釣や曳釣などの釣りである。ブリ、ヒラス、タイ、マガツオ、アマダイ、メダイ、クエなどが水揚げされている。一時期、大型マグロの漁獲で賑わったこともあるが、マグロの漁獲総量規制が始まって以降マグロの回遊経路が変化し、全く獲れなくなったという。このため若い漁師は漁業に魅力を感じなくなり、出稼ぎに転じて島を出ているという。後述するように壱岐島の東部海域ではサワラが漁獲されているが、勝本町漁協管内ではサワラは分布しておらず、漁獲されていない

この他に刺網や小型定置網などもわずかに営まれている。また採貝藻漁業も営まれていたが、近年は広範囲で「磯焼け」が進み、ほとんど商売にならないらしい。

養殖業は金子真珠が湯ノ本湾で真珠養殖を営む。また辰の島の湾内で、漁協がコンブとワカメを試験養殖している。

勝本町漁協が営む事業は購買、販売などの一般的事業の他に、「辰の島巡り遊覧」と渡船、船着場でのカフェ事業と観光事業にも取り組んでいる。コロナ渦にあって観光事業は大きな影響を受けたが、最近は回復基調にあるという。

勝本港と中央右の勝本町漁協（左）、港内に係留されたイカ釣り船（右）

朝鮮通信使

漁協で話を聞いてから勝本町内を散策する。昼食の時間になったので食堂を探す。近くを通りかかった青年に尋ねると食事の店「よしもと」が美味しいと勧められ、バイクで店まで案内をしてくれた。勝本の人は親切である。ここで「かつ丼」を食べる。西日本の丼物は汁がたっぷり掛かっているのが特徴だ。関東人からすると少し抵抗がある。

荒神社を通り、階段を登って下ると乗越地蔵堂があり、ここを過ぎた一帯が朝鮮通信使迎接所跡になる。江戸時代の朝鮮通信使は対馬島から壱岐島を経て相島（あいのしま）に渡り、下関から瀬戸内海を航行した。この朝鮮通信使の壱岐島における迎接所が勝本浦に置かれていたわけだ。朝鮮通信使は 1607 年から 1811 年までの約 200 年間に 12 回訪日しているが、このうち勝本浦には往路 11 回、復路 8 回の合計 19 回寄港している。

朝鮮通信使の迎接所があった場所は勝本港西部の湾奥一帯で、志賀山を越えた南北に細長い長方形の区画である。用地は約 2,500 坪あったらしい。ただし現在は基礎石と伝えられる石が 3 個残っているだけで、道路の両側に人家が立ち並ぶ。その一角に朝鮮通信使の案内

板が置かれていた。

朝鮮通信使一行は、朝鮮人が平均 450 人、案内の対馬藩が約 800 人の大部隊で、道中の接待と送迎は沿道の諸大名に課せられた。勝本浦は平戸藩が治めていたので、迎接費用は同藩が負担した。1711（正徳元）年の古文書には、勝本浦で３日間の饗応に費やされた品目と数量が記録されているが、山芋 1,500 本、鶏卵 15,000 個、アワビ 7.5 トン、スルメ３トン、米 7.5 トン、清酒 15 石（一升瓶で 1,500 本）という膨大なものだったという。接待費用は平戸藩の負担であったが、後述する当時の鯨組の大富豪であった土肥鯨組の４代市兵衛はその巨額の費用を一人で賄ったと朝鮮側の記録に残っているそうだ。

この迎接所のはずれの海側に聖母堂がある。キリスト教と勘違いされそうな名前だが、島内有数の古い神社で、神功皇后の三韓出兵が創建の起源といわれ同皇后を主祭神としている。本殿は 18 世紀中ごろに再建されたものであるが、西門はさらに古く、豊臣秀吉の朝鮮出兵の折に、加藤清正が周囲の石塀と共に造営して寄進したものとされている。

聖母堂から東に進んだ先に厳島神社がある。北部九州から朝鮮半島への海上安全の神として、大和朝廷によって玄界灘の島々に祀られた社の一つとされる。

朝鮮通信使の迎接所が置かれていた敷地内中央の道路と人家（左）、神功皇后を祀る聖母堂（右）

勝本城跡

勝本浦の西エリアを回り、市役所支所脇の城山に行く。城山は勝浦漁港の背後の高台にあたり、ここに勝本城の跡が残されている。この城跡は国の史跡に指定されている。

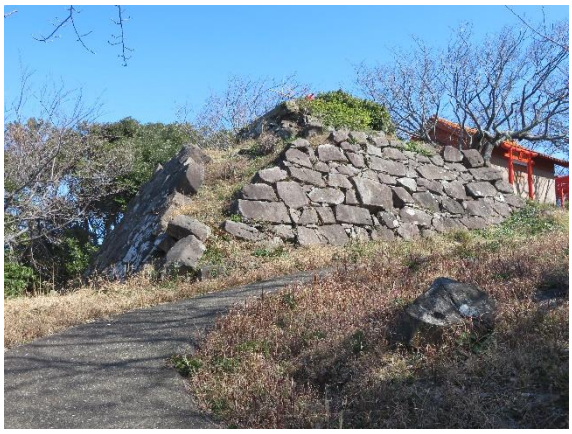
豊臣秀吉は「文禄・慶長の役」に際して本陣の名護屋城から朝鮮への経由地となる壱岐と対馬に兵站基地となる城を築くことを命じた。壱岐においては島の領主である松浦鎮信（しげのぶ）が主に築城にあたることになった。1591 年（天正 19 年）夏から工期約 4 ヶ月というごく短期間にこの城は築かれ、文禄・慶長の役を通じ利用された。平戸藩の他に島原藩の有馬晴信、大村藩の大村喜前、五島藩の五島純玄（すみはる）などの領主も協力したという。この城は朝鮮半島にわたる兵士の食料や武器などの補給や修理にあたる前線基地の役割を果たした。

1598 年（慶長 3 年）に秀吉が没し朝鮮から撤兵した後に建物は取り壊された。

現在は勝本港を望む城山の山頂部に本丸跡の石垣や礎石群が残されているだけで、城山公園として整備されている。公園内に城山稲荷神社が鎮座しており、本丸跡からは勝本小学校の先に勝本港、若宮島、辰の島、名烏島（ながらすじま）などが見える。

城址に登る階段の手前に諏訪の「御柱（おんばしら）祭り」で使われた樅の大木が立っていた。長野県

の諏訪で生まれた松尾芭蕉門十哲（芭蕉の弟子のうちの高弟 10 人）、の 1 人である河合曾良（「奥の細道」の奥州・北陸の旅に同行した弟子）は、幕府の巡見使の随員となり九州を回った折に壱岐島の勝本で病死した。そして勝本に葬られ、墓もある。こうした縁で諏訪市と対馬市は姉妹都市の関係にあり、７年ごとに更新された柱が送られてくるようだ。



勝本城の石垣（左）、勝浦城址の展望台（右）

芦辺

勝本から谷江川沿いを芦辺に向かう。途中に田園風景が広がり、アスパラガス栽培のハウスも見られた。旧芦辺町との町境に近い新城という場所に「文永の役」の古戦場跡があり、元寇殉国忠魂塔が建っていた。

1274（文永 11）年 10 月 14 日、浦海海岸に上陸した蒙古軍は守護代平景隆を首将とする百余騎の武者が蒙古軍を迎え討ち、各地で戦ったが、庄ノ三郎ヶ城の前の唐人原で大敗し、樋詰城に退き、翌 15 日に全滅したという。文永の役での元軍との戦いは主として旧勝本町の町域が主戦場となった。このことを裏付ける伝承地として、元軍の上陸地、古戦場、城、千人塚、元軍から身を隠した人穴などが残っている。

谷江川の河口が芦辺である。旧町のうち郷ノ浦、石田、勝本は何れも港湾であったのに対し、芦辺は漁港（第３種）になっている。河口域は芦辺大橋によって両岸が結ばれており、港の南側に壱岐市役所の芦辺支所、北側にジェットフォイルとフェリーのターミナルや箱崎漁協が置かれている。

文永の役の新城古戦場跡（左）、芦辺港のジェットフォイルのターミナル（右）

芦辺は旧芦辺町の町役場があったところで、旧町役場の建物は壱岐市役所の芦辺庁舎に

変わった。この庁舎には保健環境部と教育委員会が置かれている。

島の南西部に位置する郷ノ浦とともに、芦辺は北東部の海の玄関口になっていて、博多港と対馬島の厳原を結ぶ九州郵船のフェリーのうち１日１便が芦辺を経由する。またジェットフォイルはやはり博多と厳原を結ぶ便が基本的に１日２便就航している。

箱崎漁協

箱崎漁協は芦辺港ターミナルの対岸に位置する。奥行きの狭い開放的な湾全体が芦辺漁港（第３種）として整備されている。

小さな川に架かる橋を渡ったすぐ下に２階建の漁協があり、１階は荷捌き場、２階が事務室になっている。２階の事務室に顔を出し、漁業の現状を聞いた。

箱崎漁協の正組合員は上述したように 114 人である。箱崎漁協は漁協自営の定置網として大型定置網１ヶ統と小型定置２ヶ統を営んでおり、この点が他の漁協と異なる特徴にもなっている。定置網の乗組員は約 20 人で、何れも正組合員だ。昨年度の水揚げ金額は約 2.8 億円であった。定置網の漁獲物はカツオ類がメインらしい。

定置網以外の漁業は一本釣りが中心である。１年の前半はブリとヒラマサを対象とし、後半はイサキの昼釣りにかわる。またケンサキイカと中心としたイカ釣りも兼業する。なおサワラの漁場は石田沖になるのでこちらでは獲っていない。

昨年度の定置網以外の漁獲金額は 0.95 億円で１億円に満たなかった。つまり箱崎漁協は自営定置で維持されているといっても過言ではない。釣りを営む組合員は 50 人ほどだ。このうち 70 歳以上の高齢者が大半で、40～50 歳代の組合員はわずかにすぎない。釣りの年間平均水揚げ金額は 1 人当たり 200 万円ほどであることから、若い人にとって魅力のある職業とはなっていないためだ。

箱崎漁協は産地市場を開設していない。漁獲物は箱崎漁協から福岡や関西方面の消費地市場に直接出荷している。古くから付き合いのある消費地市場がメインになっている。ただし魚種によっては長崎県漁連へ出荷するケースもある。

箱崎漁協の建物（左）、河口につくられた芦部漁港と釣り船（右）

壱岐東部漁協

箱崎漁協から南に下がった深い入江の内海湾の先端部に壱岐東部漁協がある。漁協に顔を出すと、ちょうどイスズミの駆除の用意をしているところだった。磯焼けが拡がっている

ため、大型海藻の食害魚であるイスズミを２班に分けて駆除しているとのことだ。しかしこの時期、イスズミはあまり獲れないという。

壱岐東部漁協は、漁業の他に、内海湾という深い静穏域を抱えていることからヒトエグサや真珠母貝、カキの養殖も営まれている。また正組合員は上述したように 150 名である。

壱岐東部漁協の漁業はサワラの曳釣りと潜水漁業がメインで、この他に刺網を営む組合員が１～２名いる。曳釣りは 60 人ほどが営む。壱岐東部漁協ではこのサワラに「極（きわみ)」というブランドを付けている。３～５kgの成魚が対象で、「脳天活け〆」した後に水氷に漬け、専用の保護シートで覆って出荷する。釣り揚げから出荷までのガイドラインを作成し、ブランド化を図った。

潜水漁業はこの漁協の特徴で、男の海士と女の海女がいる。こちらではウエットスーツの着用は禁止しており、レオタードを２枚重ね着して潜るらしい。漁獲対象はアワビ、サザエ、ムラサキウニで、アワビとサザエは５月～９月末まで、ムラサキウニは５月中が漁期である。壱岐の特産品であったアカウニは壊滅状態になっており、アワビも激減していることから潜水漁業は厳しさを増している。

潜水漁業の端境期対策として、漁協では 2015（平成 27）年度からカキの自営養殖を開始した。ちょうど漁協の事務所脇の作業場でカキ殻を清掃する作業が行われていた。カキ殻に付着した付着生物をグラインダーできれいに削り取る作業である。この作業に従事しているのは海女と海士でほぼ全員が後期高齢者と思われた。紅一点は兵庫からきた若い女性で、海女の研修で壱岐東部漁協にやってきて３年半になるという。

壱岐東部漁協では、殻付カキで出荷している。種苗は宮城県から購入しており、年間約４万枚ほどだという。原盤１枚当たり２～３kgのカキ収量になり、種苗導入後１年で出荷している。しかし作業中のカキはずいぶん小さいものだった。収穫したカキはゆうパックや壱岐市の「ふるさと納税」の返礼品として流通している。

作業場の外にフサコケムシが覆われた養殖籠が干されていた。カキ養殖の漁場の水深は２ｍほどと浅いようだが、これほど大量にコケムシが付着した状態は見たことがない。コケムシの付着によって潮通しが悪くなり、餌の供給が減少、このことによってカキの成長は阻害され、小ぶりなのだろう。

カキ殻を清掃する組合員（左）

フサコケムシがびっしり付着した養殖籠（右上）

兵庫県からやってきた海女研修の若い女性（右下）

古墳

壱岐東部漁協から島を横断する県道 174 号を西に進み、湯ノ本温泉に向かう。

壱岐島には 280 基ほどの古墳が確認されている。この数は長崎県全体の約６割にあたるというから壱岐は特異的に古墳の多い島といえる。これらの古墳は島全体に分布している。古墳のタイプは前方後円墳と円墳の２種類である。島で一番古い古墳は５世紀後半のもので大塚山古墳という。

県道 172 号が国道 382 号と交わる亀石の交差点の手前、国分寺のあった跡の周辺に特に重要な古墳があり、国史跡の「壱岐古墳群」に指定されている。この古墳群を構成するのが対馬塚、双六、鬼の窟、笹塚、兵瀬（ひょうぜ）、掛木の６基である。対馬塚と双六が前方後円墳、残りの４基が円墳である。この古墳群は島内各地に分布する古墳とは異なり、大規模なものであることから当時の首長クラスの墓と見られている。これらの古墳は６世紀後半から７世紀前半にかけて築造されたものである。

このうち、鬼の窟、双六、笹塚の各古墳を見に行った。鬼の窟古墳は最長の石室を有し、厚さ１m、畳ほどの岩が重なっており、これは「鬼の仕業だ」ということから名付けられたらしい。また双六古墳は長崎県最大の前方後円墳である。いずれの古墳も発掘・調査されており、内部を見ることができる。

前泊に引き続き湯ノ本温泉に宿泊することにしており、この日は国民宿舎壱岐島荘に予約を入れていた。県道 174 号を通り、湯ノ本湾々奥の高台にある同館に車を走らせた。

国民宿舎は地下に大浴場があり、１階がロビーと事務室、２階が食堂・レストランと客室、１部３階建てのフロアーには客室が配置されている。客室は全部で 21 室あり、宿泊収容数は 80 名であるから、湯ノ本温泉では一番大きな宿泊施設と思われる。夕食は壱岐牛の陶板焼きと刺身がメインであった。

県内最大の前方後円墳・双六古墳（左）、鬼の岩屋古墳の内部（右）

２月 17 日

猿岩と半城湾

国民宿舎壱岐島荘を８時 25 分に出発し、湯本湾に沿って黒崎半島先端の猿岩に向かう。

湯本湾には真珠養殖の延縄施設が広がる。途中の道路脇に真珠会社の作業場があった。湯本湾では金子真珠の他に数社が真珠養殖を営んでいるが、そのうちの１社と思われる。

猿岩に向かう道路の一部は工事中であった。工事現場を過ぎた先に黒崎砲台跡がある。案

内板の前に立つと、自動的に砲台を解説する放送が流れてきた。この黒崎砲台は 1928（昭和３）年から６年かけてつくられたようだ。1909（明治 42）年から始まった対馬海峡防備を目的とした壱岐要塞を構成する１つである。

砲台には巡洋艦「赤城」の主砲塔が据え付けられた。砲身だけが地上部に出ていて、山をくり抜いた地下が弾薬庫になっていた。ここには直径 420 ㎜のカノン砲２門が据えられ、砲身の長さは 18m、射程は 36 ㎞だったという。しかし一発も撃たれたことはなく、「撃たずの砲台」といわれていた。近くに戦艦大和と黒崎砲台の砲弾が比較のために並べられていたが、大和の方が２周りほど大きい。砲台に登る入口の地下は途中まで入れるが、その先は柵が設置され、立入禁止になった。

黒崎砲台跡の先に猿岩がある。岬の先端に猿の顔のような巨大な岩がそびえている。壱岐の代表的な観光地のようで、岩を眺望する場所は広い駐車スペースが整備されていた。ちょうど観光バスの一団が降りてきて、猿岩をバックに記念写真を撮り、去っていった。

猿岩の近くに「壱岐出会いの村」という宿泊施設があった。しかし入口は閉鎖中でどうやら営業はしていない様子である。２年以上続いた新型コロナの影響なのかもしれない。

黒崎半島から県道 59 号に戻り、郷ノ浦に向かう。県道 59 号は内陸部の高台を通っているが、途中に御津ノ辻休憩所という駐車場公園があり、ここから郷ノ浦湾の北側に位置する半城（はんせい）湾が一望できる。半城湾はリアス式の入江が多く、湾内にはたくさんの真珠養殖用の延縄施設が並んでいる。

2018 年漁業センサスによると、壱岐島の真珠養殖経営体は郷ノ浦が２経営体、勝本が１経営体、合わせて３経営体である。また母貝養殖は郷ノ浦１経営体、勝本１経営体、壱岐東部２経営体、合わせて４経営体である。郷ノ浦はこの半城湾に漁場があり、勝本は勝本湾に漁場がある。郷ノ浦の１社は福岡市に本社のある上村真珠と思われる。

黒崎砲台跡の入口（左）、半島先端付近の猿岩（右）

郷ノ浦町漁協

県道 59 号を進み、国道 382 号に出て、郷ノ浦町漁協に向かう。

漁協の近くの野積場では２組の小型定置網の漁業者が網を修理していた。2018 年漁業センサスによると、壱岐で小型定置網を主として営むのは５経営体で、石田漁協２、郷ノ浦漁協２、勝本漁協１という内訳である。なお大型定置網は１経営体が箱崎で営まれていることはすでに述べた。

郷ノ浦の２経営体は小型定置網の専業で、他の漁業は兼業していない。台風時期は網を撤収するそうで、休みの期間は漁船の修理等に充てている。近年はアジの漁獲が多いらしい。

郷ノ浦町漁協は、勝浦町漁協と並んで、産地市場を営む。セリは６時から始まる。したがってすでに終了しており、市場は伽藍堂の状態だった。

市場の近くに金子産業㈱の壱岐郷ノ浦事務所が置かれている。ここではクロマグロとマダイを養殖しており、ISO22000 認定事業所とマリンエコラベルジャパンの認定書の看板がでかでかと掲げられていた。

郷ノ浦町漁協には過去に何回か伺っている。当時は郷ノ浦の市街地に中心部に鉄筋コンクリート３階建ての事務所を構えていたが、今は漁港の方に事務所を移したらしい。後ほどビルを見たが、荒れ放題になっていた。現在の事務所は平屋のプレハブ事務所である。また事務所の隣は「壱岐美食企画」の水産加工場になっている。たしか以前は郷ノ浦町漁協の加工場だったはずなので、こちらも民間に譲渡したようだ。おそらく近年、漁協経営が厳しさを増しているのだろう。

事務所には女性の事務員が１人いるだけで、参事はいなかった。参事は午後に戻ると言っていたので、彼女に名刺をわたし、15 時に再び伺うと告げて事務所を後にした。

郷ノ浦港脇の「『春一番』発祥の地」を訪れ、壱岐市役所の管財課に寄って壱岐市の管内図を購入する。360 円だった。

小型定置網を修理する漁業者（左）、郷ノ浦漁協の産地市場（右）

岳ノ辻園地

国道 382 号に戻り、永田ダムを過ぎてから右折し、岳ノ辻（たけのつじ）の園地に向かう。ここには壱岐島の属島である大島、長島、原島を訪問した時に１度来ている。

岳ノ辻は標高 212.9mで、壱岐島で一番高い。壱岐島は玄武岩質の溶岩の噴出によって平坦な地形がつくられたが、その上に火山灰や礫が堆積して岳ノ辻ができたといわれている。およそ１万年前のことである。

西側の駐車場に車を置いて、歩いて展望台に向かった。340mほど進んだ先に中央展望台が置かれている。ここからは北部九州や対馬島を見ることができるはずだが、あいにく曇っていて対馬島は見えない。なお小呂島（２つのコブがあるように見える島）、沖ノ島ははっきりとわかるし、玄海原子力発電所や馬渡島（まだらじま）をはじめとする佐賀県の離島も確認できた。

岳ノ辻は非常に眺望がきくことから、監視場所として最適であった。白村江（はくすえ）の戦いで敗北

した翌年の 664 年には新羅・唐の来襲に備えて狼煙台が設けられており、その跡が今でも残る。また江戸時代には異国船警護のために遠見番所も置かれていた。各種の電波塔や携帯電話の中継基地も山頂付近に立っている。

中央展望台の先はピクニック広場になっていて、その先には東側展望広場もある。東駐車場もあることから山の東西からアプローチできる。

岳ノ辻の展望台（左）、狼煙台跡（右）

南部海岸と集落

岳ノ辻から県道 175 号に出て、壱岐の最南端の初瀬（はぜ）に向かう。

南に開かれた細長い入江が初瀬漁港（第１種）になっていて、入江を取り囲むように集落が帯状に続く。初瀬はもともと広島から移住した漁師の集落である。延縄漁が盛んで、ブリやクエを釣る。たしかクエの調査で初瀬には一度来たと思う。延縄以外にイカ釣りを営む。

湾奥の外海側に「初瀬の岩脈」と呼ばれる地層が露出している。地下から成長してきたマグマが噴火直前に地中で固まったもので、最初の噴火で白い流紋岩が誕生し、後の火山活動で幅 17m～18m の黒い玄武岩が垂直に貫入したものだ。つまり壱岐島は火山島であったことを示す重要な証拠として注目されている。

初瀬から県道 179 号を北上し、印通寺に向かう。山越えの道を進むと、眼下に久喜漁港（第１種）と集落が見えてきた。沖には上述した妻ヶ島という無人島が浮かぶ。島の西側には円型の生簀が４基ほど浮かんでいた。久喜の集落はこの付近では大きな集落で、2022 年末時点での世帯数は 155 戸、人口は 412 人に及ぶ。漁船も多い。

初瀬の岩脈（左）、久喜の集落と漁港（右）

松永安左衛門記念館

印通寺の中心部に松永安左衛門記念館が置かれている。壱岐に着いた初日に記念館を訪れたが、休館日だったため改めて訪れたものである。

松永安左エ門（1875～1971）はこの地の出身で、裕福な商家に生まれた。1889（明治 22）年に上京して慶応義塾に学ぶ。父の死で帰郷し、家督を相続、21 歳の時に再び慶応義塾に戻り、福沢諭吉のもとで学ぶ。しかし学問に興味がなくなり、中退して日本銀行に入行した。その後、福博電気軌道の設立に関わり、九州電灯鉄道、東邦電力と電気事業を営む。戦後は九電力体制（戦時の日本発送電㈱を解体し、９つの電力会社に分割民営化）を構築するとともに、電力中央研究所を設立した。「電力の鬼」と呼ばれ、電力業界に大きな影響力を及ぼした人物である。一方では茶人であり、また国家による勲章を辞退したことでも知られる気骨のある人物であった。

電力中央研究所は電気の利用から環境問題に至るまで何でも研究していたから、農業や水産業の分野の研究者もいた。私は電中研のメンバーと藻場造成の仕事やヒラメの陸上養殖などで一緒に仕事をしたことがあるので、松永安左エ門のことはよく知っていた。

記念館の敷地は 1,600 ㎡で、全国の電力関係者などの尽力と浄財によって建設された。また生家の一部や土蔵などが移築されているが、これらは翁の甥の松永吉二郎の寄贈である。西鉄から寄贈された福岡市の古い市電（前身が福博電気軌道）も並ぶ。館内には松永の年譜、書や身に着けていた衣類、写真家杉山吉良が撮影した松永の写真など多数展示されていた。

記念館には私以外に入館者はいなかった。市の教育委員会の女性が記念館のガイドを務めているが、入館者は私だけなので暇を持て余し、つきっきりで説明してくれた。ただし彼女は松永安エ衛門についてそれほど詳しくはなかった。

杉山吉良が撮影した松永安左エ門（左）、記念館の敷地と建物（右）

壱岐風土記の丘

松永安左エ門記念館を後にして、国道 382 号を通り勝本に向かう。国道 382 号は対馬島北端の比田勝から対馬島を縦断して厳原に至り、壱岐島北端の勝本から印通寺を経て佐賀県唐津市の呼子を結ぶ海上国道である。

途中、旧勝本町に入ったあたりに「壱岐風土記の丘」があった。ここには掛木古墳があり、古墳館と古民家園、民俗工芸文化館が置かれている。

掛木古墳は円墳で、羨道（古墳の入口の通路）を含み、前室、中室、玄室に分かれ、全長は 13.6mである。一番奥の玄室には県内唯一の刳り抜き式家型石棺が設置されている。内部は照明が行き届き、羨道から入って、玄室の石棺を見ることができる。

上述したように壱岐島には約 280 基の古墳が確認されており、古墳館では壱岐の古墳に関する知識を学ぶことができる。また、当時の古墳築造の様子を再現した模型も置かれていた。

古墳館の奥の敷地は古民家園になっていて、壱岐島の標準的な屋敷が移築・再現されている。江戸時代中期の古民家で、母屋、家を子に譲った老夫婦が住む「インキョ（隠居）」、「ホンマヤ」という農具や穀物の倉庫と仕事場を兼ねた建物、「セッチン」と呼ぶ便所、「ウシノマヤ」と呼ぶ牛小屋などの建物で構成され、当時の生活の様子が人形によって解説されている。

民俗工藝文化館には江戸時代から昭和期にかけて壱岐で使われていた品々（古い農具、アワビ採りの道具や水中眼鏡、徳利などの生活用具、山仕事の道具など）が展示されていた。

玄室内の刳り抜き式家型石棺（左）、古民家園の母屋（右）

鯨組土肥家

勝本浦はかつて古式捕鯨の基地があり、大いに繁栄した土地である。前日は時間がなく、捕鯨に関する史跡を見ていなかったので再訪することにしたものだ。

海岸通りには永取家が建てた鯨供養塔が置かれている。永取家は勝本で最後まで捕鯨を営んだ家で、もとの姓を原田といった。1864（元治元）年５月に平戸藩第 10 代藩主（松浦家第 35 代）の松浦熙（1791～1867）より「永取」の姓を賜ったそうだ。勝本浦最後の捕鯨家に鯨が永く取れるようにとの願いを込めたものだと伝えられている。

また勝本漁協の近く（勝本の東ブロック）には勝本浦で繁栄を誇った土肥家の別邸・土肥家御茶屋屋敷跡があり、当時の大きな石塀が残されている。土肥家４代目の土肥市兵衛秀睦は聖母神社の本殿を総欅の厚板で造営して寄進、同時にこの大石塀を 1767（明和４）年に築いた。この塀は「阿房塀」と呼ばれ、壱岐市の文化財に指定されている。塀の高さは高いところで７m、長さは約 90mに及び、敷地を取り囲んでいる。使用されている砂岩の切り石は近くの串山半島の吉細浦から運ばれ、完成までに３年を費やしたと伝わる。

ここで約 200 年に及ぶ勝本での捕鯨の歴史を振り返っておこう。

勝本で捕鯨が始まったのは 1657（明暦３）年に平戸の吉村庄右衛門が鯨３頭を突き取っ

たのが最初といわれている（西海捕鯨記）。

1704（宝永元）年に大村の深沢儀太夫が初めて鯨網をだす。この時期に突き取り法から網取り法への転換が行われた。1739（元文４）年、生月（いきつき）の益富又左衛門と勝本の土肥市兵衛が瀬戸の前目浜と田ノ浦の漁場を隔年交代で使用することを決めている。

ところで土肥鯨組はもともと平戸の出身で、二代目土肥市兵衛がマグロ網で財をなし、正徳年間（1711～1715）には芦辺の篠崎や瀬戸の布屋など５名共同で鯨組を始めていた。そして 1736（元文元）年に土肥組として独立する。上述した４代目土肥市兵衛秀睦の時が土肥家の全盛期で、例えば 1770（明和７）年には冬漁でセミ鯨 35 頭、ザトウ鯨１頭、春漁ではセミ鯨５頭、ザトウ鯨２頭の合計 43 頭を漁獲している。土肥鯨組は、壱岐以外に唐津藩の小川島、平戸島、小値賀島、平戸島の津吉、大村の蠣の浦島、さらには対馬にも捕鯨基地を拡張し、１年間の鯨の捕獲数は優に 200 頭を超え、鴻ノ池や三井と共に天下の大富豪に名を連ねていたという。

しかし欧米の捕鯨船が日本近海にやってきて近代的漁法で鯨を取り始めると、日本沿岸への鯨の回遊量は激減、土肥鯨組は安政年間（1854～1859 年）に９代目で解散し、創業以来 160 年の歴史に幕を閉じた。

その後、勝本の捕鯨業は原田家、上述した永取鯨組によって続けられた。しかし天保～弘化年間は 40 頭前後の鯨が獲れていたが、幕末には年間の漁獲数は数頭に落ち込んでいる。1867（慶応３）年に永取家当主が病没したことにより、廃業する。湯ノ本の長谷川善助が明治時代に入り、漁場の免許を受けているが、不漁のため 1884（明治 17）年に解散し、勝本浦における約 200 年にわたる捕鯨は名実ともに終焉した。

海岸通りに置かれている鯨の供養碑（左）、土肥鯨組の阿房塀（右）

国民宿舎のレストランは昼食も提供しており、壱岐牛のステーキを食べようと思って勝本からわざわざ湯ノ本まで出かけたのだったが、すでに昼食は終了していた。

湯ノ本地区に鯨床（いさふし）という名の小学校があった。勝本は古式捕鯨の盛んだった土地なので、鯨床という地名が捕鯨と関係があるのではないかと思い、その手掛かりを求めて小学校の周辺をウロウロしていたら、不審者と思われたらしく、２人の教員が現れた。面倒なことにならないようにそそくさと退散した。近ごろは都会の小学校に不審者が現れ、事件を引き起こすことが報道させるせいか、地方の小学校でも警戒が厳重なのである。

家畜市場とＪＡ肥育センター

県道 174 号を直進し、梅ノ木ダムの手前を左折した先に壱岐家畜市場がある。旧芦辺町にあたる。ＪＡが運営する市場で、この他に事務所、資材センター、出荷貯蔵施設、担い手サポートセンターなどが置かれ、壱岐市の家畜診療所もある。

セリは年に６回、偶数月に２日間にわたって実施される。上述したように畜産業（子牛の繁殖生産と肥育）は壱岐の最大の産業であることから、セリ場はかなり規模が大きい。セリ市では毎回 700 頭前後の子牛が売買されている。

令和３年の飼育農家数は 575 戸で、飼養する親牛数は 6,293 頭であった。農家数は年々減少しているが、１戸あたりの平均飼養頭数は増える傾向にあるから島全体の飼養数はあまり変わらない。子牛生産の最大手は「㈱べんべご」で、年間 100 頭ほど出荷している。

近年の子牛の販売頭数は、年間 4,000 頭前後で推移している。平均販売価格は平成 28 年の 85 万円をピークに下落傾向にあり、令和２年は約 70 万円であった。

ＪＡの事務所で道を聞き、引き続いて芦辺町箱崎にあるＪＡの肥育センターに向かう。このセンターは 1992（平成４）年度に、農水省の「肉用牛等振興施設整備事業」で整備されたものである。

日本の多くの離島は子牛の繁殖が中心で、肥育する島は沖縄県の石垣島、香川県の小豊島（おでしま）、島根県の西ノ島などかなり限られている。しかし壱岐島はかなり肥育が盛んであり、令和３年には 12 経営体が肥育に取り組んでいる。そのうちの最大手がこのＪＡ肥育センターなのだ。肥育された和牛は「壱岐牛」のブランドで出荷される。年間の出荷数は 800～900 頭ほどであり、このうちこのセンターが 550 頭ほどを占めている。

なお、壱岐島には屠場がないので、生きたまま島外の家畜市場に出荷しているが、そのうち最も多いのが福岡食肉市場である。

この肥育センターにはロール状に巻いた乾草の保管庫と牛糞堆肥に加工する施設が併設されていた。

壱岐家畜市場のセリ場（左）、ＪＡの肥育センター（右）

ＪＡの肥育センターから 15 時に伺うと約束していた郷ノ浦町漁協に行った。参事は戻ってきてはいたが、取材は断られた。続いて取材が残っていた石田町漁協に向かう。

石田町漁協

港内には石田町漁協の２階建ての事務所がある。１階の荷捌所にはサメを駆除するため

の太い延縄が置かれていた。「離島漁業再生支援交付金」を活用して最近増えてきたサメの駆除に力を入れているようだ。

石田町漁協では荷捌き場にいた若い職員に話を聞いた。

同漁協の正組合員数は上述したように 99 人。サワラ釣の漁船は 50 隻ほどなので組合員の約半数が従事する基幹漁業である。漁期は 12～３月で、ちょうどサワラの盛期に当たっていた。近年、サワラの資源が増えているという。壱岐島のサワラは東部海域が漁場で、西部海域では獲っていない。したがって壱岐島でサワラを獲っているのは石田町漁協と壱岐東部漁協だけである。ちなみにサワラは比較的浅い海域に分布するが、島の北部から西部の海域は水深が深く、サワラの漁場には向かないらしい。サワラは曳釣りで漁獲する。餌はサンマないし疑似餌が使われている。

石田町漁協では「一本釣さわら活〆」としてブランド化している。ブランド化の基準は、「身に傷がないこと、鰓を切り血抜きすること、水氷に漬けること」としている。上述した壱岐東部漁協の「極」ブランドとは定義が異なる。サワラの主な出荷先は岡山県である。近年、サワラの資源が増えているが、今年は昨年の半分ほどと少ないとのことだ。現在のサワラの相場は 2,000～3,000 円／kg で推移しているという。

サワラの曳釣に次ぐのがイカ釣りである。20～30 隻が着業している。漁期は５～10 月である。クエの延縄や一本釣は９～11 月が漁期で７人が営む。クエは最近、長崎県が稚魚を放流しているので、資源が増えているという。

釣に次ぐのが潜水漁業で、30 人ほどが従事している。ウエットスーツ着用の素潜りで、現在はアワビとクロウニ（ムラサキウニ）を採取している。ただアワビ資源は大幅に減少しており、漁獲量は少ない。かつてアカウニをメインに獲っていたが、現在は壊滅状態にあるという。資源が多いころはヘルメット潜水でアカウニを獲っていたらしい。

以上のように石田町漁協は釣りと潜水漁業がメインで、海面での養殖業は営まれていない。陸上養殖が行われているようだが、確認できなかった。

「一本釣さわら活〆」としてブランド化されているサワラ（左）、サメ駆除用の延縄（右）

石田町漁協から国道 382 号を通って郷ノ浦に戻り、レンタカーを返却する。17 時 05 分発のビーグル号で郷ノ浦を出発。博多港に入港後、バスで博多駅に向かった。その後、九州新幹線で鹿児島中央駅に出て市内に宿泊する。翌日、奄美大島に向かい、追加取材する。